
君の隣

望実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の隣

【Nコード】

N1897B

【作者名】

望実

【あらすじ】

春喜は普通の大学生。大好きな彼と友達と楽しく過ごす毎日の生活が永遠に続くと思っていたが…！？

春の恋

夢の中で、君に触れた。

柔らかめの髪、子犬のような小さな瞳、厚い唇、大きな手が、全て愛しい。

「ダイスキ。」

夢の中でも、抱きしめられると最高に幸せな気分になる。

いつまでも、こうしていたいのに…

それなのに…

「朝だよ！起きてるかな？」

というふざけた携帯の目覚ましの音が聞こえてきて、私、水野春喜は意識を戻した。

「せつかくいい思いしているのにさー！」

「あと5分！」そうつぶやき、布団の中で繰り返し、余韻に浸ろうとしたが、現実、それを待ってくれず

「げっっ！もうこんな時間！」

と、一気に意識を引き戻した。

「現実、は厳しいっ！」

なんて思いながら、急いで支度を始め、タンスの引き出しを開け、

洋服を眺めながら色々考えるが、時間に追われている為、これでもいいかな？つと、服を選ぶ。

女の子としてこれでいいのか…疑問を残しながらも、髪を整えた。慣れた手つきでオイルを両手にとり、髪に馴染ませていき、途中、鏡の中の自分と目が合ったが、コンプレックスだらけの顔に目を反らし、スタイリングに集中をした。

家の中は静かだ。

いつもの様に両親は先に出たらしい。

居間に入ると朝食が出されていたので、私はインスタントのカフェオレにお湯を注ぎ込み、食パンを口にはうばり朝食を済ませた。

時計が8時をまわり、家をでみると、季節はすっかり冬を向かえていたためか……寒い。どうして冬はこうも寒いのだろう？なんて思いながら、冬の空気の冷さに、コートの襟に首を埋め、肩を上げ、ふと空を見上げた。

空は快晴で一面青く、青い色には、白い月がうつすらと浮かび上がり、私は、そんな空を見ながら彼に逢えるかな？なんて乙女のように願いを掛けて大学へと向かった。

今日は水曜。大学に向かう途中で、バイト先へと向かう大好きな彼、亮介の車を発見するのが、とても楽しみだった。

自転車を漕ぎながら、一台一台走る車を覗き、亮介の車を探す。

「片思いみたい。」

そう思っても、その行動を止める事はできなかった。

道の途中、コンビニ前の横断歩道で、信号が青に代わるのを待っていると、出勤の車達に混ざりながら、亮介の車を発見し、

「りょくすけ。」

心の中で名前を呼ぶ。

音楽好きの亮介の車からは、ノリの良い音が車から溢れ出し、亮介らしいと思いながら、少しの幸せを感じていた。

すれ違うとき、亮介と二人でeyeサインを送りあうと、信号が青にかわつたのに気付づき、自転車を逆方向へと向け、駅へと向って漕ぎ出した。

大学に着いた私は、急な坂道を登って行かなくては行けないため、朝から辛いなあと感じながら、歩いていると

「おはよう。」

という友達の夏樹にきずき、挨拶を返す。

夏樹は、亮介を知るきっかけを与えてくれた友人で、自分をしっかりと持つ、とても素敵な女の子だ。私は夏樹と友達になれた事を誇りに思う。

坂道を歩きながら、

「ああ、今日は、亮介ですか？」

と、夏樹がからかいだし、会話が弾む。

「うん。亮介だよ。」

「いつも思っけど、何処がいいの？」

「全部。大好き。」

「ハイハイ。朝から聞いた私が馬鹿でした。バカップルちゃん。」

ちよつとパターン化したやり取りがたまらなく楽しい。そんな風に
過ごす毎日が私を安心させてくれた。

春の恋

お昼を終えて、次の講義の準備をしていると、携帯が鳴り出し、着信音で亮介からのメールだとわかった。

急いで携帯を上着のポケットから取り出し、メールをみる。

「今日、逢えない？」

亮介からのメールの文章に急いで返事を打つ。

「いいよ。」

「じゃあ、学校終わったらいつもの駐車場まで向かえにいくよ。」

「本当？ありがとう。」

「（ @ ）じゃあ、勉強頑張つて！」

「亮介もね。」

亮介とのメールのやり取りで、浮かれながら、講義室へとむかった。

午後一の講義は、程よい満足感と室内の暖房の暖かさに睡魔に襲われる為、九十分という長い時間睡魔と戦わなければならなかったのだ。ノートを書きながら、亮介の事を考えていた。頭の中は、馬鹿みたいに亮介でいっぱいだ。いくら思っても、飽きが来る事はなかったし、目をつぶれば、すぐに亮介を頭に思い描けた。

髪の毛や輪郭、声、タバコの匂いとかすかに香る柑橘系の香水の匂い…いつもしている腕時計。

全てが色鮮で、思い出すだけで胸が高鳴る。

「今の私、変態チックよね。」

一人で陶酔していると、ふと、彼からのメールを思い出し、また顔がにやけてしまった。

「今日、逢いたいなんて…。」

亮介からの一言が、何故、こんなにも嬉しいの？いつまでも片思いの時みたいに、亮介の一言一言に感情が振り回されてしまうのが恥ずかしいと感じながら、今はこんな風に亮介を中心に、自分がいる事が楽しかった。

しかし、私はぐやがて知っていたのです。

どれだけ、自分が醜い感情を持ち、子供過ぎだったかを…。

春の恋

講義が終わり、私は大学近くのコンビニにまで急いで向かった。

大学の後の亮介との待ち合わせに使っている場所で、私達が初めてであった場所だった。私が少し遅れる事が多いので、いつも亮介はファッション雑誌か音楽雑誌を立ち読みをしていた。

この日も、そうだった。

外から、亮介の顔外出みえ、何気なくその顔を覗いてみると、その表情は少しだけ違って見えた。雑誌を見ているようで、目が、ぼんやりとし、全く見ていない…。

「何かあったのかな…?」

私は気にしながらも、普段通りに呼びかけた。

「ゴメン！お待たせ。」

すると、ゆっくりと持っていた雑誌を閉じて、私の方を向いた。

「遅いよ。」

亮介は、そういいながらも許してくれるので、私は、彼のそんな部分に大分甘えていた。

私達は、コンビニから出て、亮介の車に乗り込んだ。いつもなら、

とりあえずフラフラするのだけど…

「川原行きたい。」

という亮介の提案で、川原に向かった。車の中には沢山のCDやMDが積んであり、それは亮介にとって宝物のような物だった。私はそれらに触る事を許されている事に、特別感を感じる事ができた。

アルバムを見る様に、一枚一枚CDやMDを見ていくと、真新しいMDに気付き、川原へと車を走らせる亮介に、新しく増えたMDを尋ねた。

「これは…？題名ないけど…」

亮介はどのCDもMDも丁寧に解りやすくしてあったので、珍しいと思った。

「別に…。何でもないけど…。気にしないで。」

と苦笑いをして、答えを詰まらせていた。

明らかに何かを隠しているが、うまく聞けずにいた。

「わかった…。」

と作り笑いをし、会話を止めた。

こんな時は、いい子な自分がとても嫌だった。けれども、小さい疑問位で争う事になる事が恐かった。

結果…見ないふり。話題を探し、亮介の好きなアーティストに話しを振った。

新曲は何時だ？とか、前のライブの話とか当たり障りの無い話しで会話が続き、私達の車は川原沿いにある公園の近くの駐車場入っていった。

春の恋

公園に人影はなく、とても静かだった。

空に沈みかけた冬の夕日は、気圧の関係か、少し欠けて見え、それもまた綺麗だけど、欠けているのが心を切なくさせた。その夕日が車から降りた私達の影を映し出していた。

私は、二つに並ぶそれを目で見つめていた。

「亮介と私。」

いつまでもこの影を見る事ができたなら…永遠と呼ぶのかな？

車から降りてから、私達に会話はなく、ずっと黙ってベンチに座っていた。

私達の間に流れるのは、川の音と、近くの道路を走る車の音だけだった。

黙ったまま苦手な煙草を吸い込む亮介と、今の状況を何とかしたくてあれこれ考えるが、何も出来ず、じっと待つ私。やっこの思いで話し掛けた。

「寒いね。」

「…うん。」

亮介の答えは、ただ返事をしているようだったけれど、私は会話を続けた。

「何考えているの？」

「…色々。」

「色々ね。分かった！お腹空いたから何処で食べようかとか？」

場を盛り上げようと、おどけてみたその時に、亮介が真剣な顔をして私と視線を合わせた。

「…春喜。」

そう亮介が私の名前を言い、私に緊張が走った。

「なあに？」

亮介は、一息深呼吸をし、ゆっくり話しを始めた。

「ずっと考えていたんだけど、…俺…。」

亮介が話しをしているにも関わらず、突然言葉が飛び出した。

「ヤダ！」

聞いてしまったら、見たくない現実を直視しなければいけないような気がして、思いより先に言葉がでてしまった。

「春喜、…まだ何も言ってないよ。ちゃんと聞いて。」

優しく言う亮介。

「嫌なの。わからないけど聞きたくない。」

感情が高ぶり目には涙が溢れていた。どうしてもコントロールが聞かなかった。

無言で見つめあい、白い息が口から出ていくのがわかる。本当なら、きちんと亮介の思いを聞いてあげたい。理屈で理解しても、訳のわからない不安と感情で、できなかった。

「春喜…。」

「春喜…ごめんね。」

亮介は悪くないけど、これから話そうとする事が、私を傷つけるとわかっているから…だから…ごめんねがでたら本当に覚悟を決めたのだろうな。

「春喜」

「…うん。」

やっとの思いで返事をした。

「春喜、俺は、ずっとやってみたい事があった。」

「…知ってる。」

「自分の力で何とかしたくて、夢を叶えるために働きながらお金を貯めてきた。」

「…知ってる。」

「今やつと準備が整ったんだ。覚悟も決めた。だから…ここから出ていくよ。」

亮介の夢をしっかりと持つところに惹かれたのに、大好きな分、余計に苦しかった。

亮介はそれ以上の話をしなかった。

私も話しをしなかった。

夕日もしっかり沈み、二人の並んだ影は見えなくなっていた。

春の恋

帰りの車の中に、重い空気がながれ、フルボリユームのはずの音楽もぼんやりと聞こえていた。

上手く息ができない。

泣きたくないと、我慢しても、涙がとまらず、唇は噛み過ぎていたかった。

亮介に気を使う余裕がなく、土壇場での自分の器の小ささを思いしり、さらに嫌になった。

なんだか、夢の中にいるみたい。

人事のような気がする。

亮介が何か話しているようだけど、聞こえない。

聞きたく無い。

隣にいる亮介の体温を、今は感じる事ができる。だけど、亮介と離れるという事は、隣にいる亮介を感じられなくなり、当たり前だった物が無くなるっていう事だ。

私の幸せ…亮介の幸せ…。

同じ目線で見ていたような私達だけど、描く世界が違い過ぎて、亮介がわからない。

わからないのが淋しい…。悲しい…。自分が悔しい。

夜の暗闇が、私の気分をより暗くさせ、心に明かりを感じられずにいた。

車が自転車を置いてある駅につくと、亮介に名前の無いMDを渡された。

「…春喜…出来れば君に一番に聞いて欲しい。」

私は、頷きさえも出来なかった。しかし、亮介は続けて言った。

「今日は、ありがとう。それから、傷つけてゴメン。」

じっと黙り込む私。

「じゃあ…気をつけて。…」

私が家の方向に向かったのを確認すると、亮介が車を発車させた。

家につき、部屋に入る。

暗いく、寒い部屋。亮介との二人で写っている写真を見て、戻りたいと願った。

幸せそうに笑っている自分の顔を眺めた。

学校にいる間は、ずっと続くと思っていた二人の時間。

亮介の時間と私の時間が重なって、同じ時を過ごせる幸せ。

それだけが幸せじゃないって知っていたけど…。

理解をする事ができなかった。

春の恋

「春喜…講義終わったよ。」

夏樹に呼ばれ、気がついた。

「最近、変だよ…。どうしたの?。」

私は、あの日以来、体が記憶している無意識の意識で過ごしていた。朝起きたら、味のわからないパンを飲み込み、学校に向かい、夏樹の話に適当に頷いたり笑ったりしていた。

そんな単調なリズムを繰り返していたので、時間の感覚はなかった。

そんな私を見兼ねて、夏樹が言葉を掛けてきた。

「亮介と何かあった?」

夏樹に心配されているのが、辛く、誰に聞いて欲しかったため、あの日の事を全て話した。

夏樹なら、分かってくれる気がしたからだ。

しかし、夏樹は…

「…馬鹿。春喜は、馬鹿だよ!自分勝手もいい加減にしろよ。」

と、私を叱った。それからさらに続けた。

「そんなんじゃない、亮介がかわいそうだよ。」

「…。」

夏樹に言い返せなかった。

「夢を追いつける所に惚れておいて、いざとなったら認めてあげないなんて…春喜の馬鹿!。」

「子供なもの、いい加減にしろよ…。」

「…。」

「自分の意見は聞いてもらって、亮介の意見は聞きたく無いなんて…私なら、間違いなく、別れるよ。」

夏樹の一言一言が、胸に突き刺さった。

正論すぎて、かなわない。

確かに、私は、亮介の気持ちを受け入れてない。

亮介は、あんなにも、私を大切にしてくれたのに…。

私は、亮介と離れるのが悲しいあまり、自分の意見だけを亮介に押し付け、亮介の夢を理解してあげようとしていなかった。

何より、亮介が私を信頼し、渡してくれたMDを聞いていないのが、もう亮介を思いやっていない。

「こんなんじゃない、亮介に呆れるって言われちゃうね。」

そう笑って言えた瞬間、少し前を向きたいと思った。

「そうだね…。」

と夏樹がニヤつきながら、私に返した。

夏樹に葛を入れてもらい、やっと、MDが聞けるような気持ちになった私は、すぐにでも家に飛んで帰って、聞きたいとおもった。

春の恋

家までの道が、やたら長く感じた。

「まだつかないの…？」

早く亮介のMDに会いたいのに、心だけが先走り、体が気持ちに追いつかない。

自転車がもどかしい。

玄関の鍵にイライラする。

やつとの思いで、部屋までたどり着くと、着替えもせず、鞆は放り投げ、机の上に置きっぱなしにしてあったMDを取り出し、コンポに突っ込んだ。

亮介と私のお気に入りのアーティストが入っていた。

二人でよく聴いた曲で、

「お気に入りベスト10」

なんて事を行った事を覚えていたのか…そのときの順番に流れていた。

「亮介、何を伝えたいの？」

その時の楽しい思い出か…それとも、別の何か？

そんな風に考えながら、一つ一つを聴いていった。

ベスト10なら、そろそろ一位になる曲が流れる前に、音源が変わった。

録音された音源のようだ。

その曲は、ピアノだけで続いていた。

キレイなメロディに歌詞はなかった。

とても繊細で切なくあり、そして甘く包みこんでくれる曲だった。

「…ああ、亮介がいた。」

私は、彼の表現の世界に入り込み、彼を見つけ、泣いていた。

好きな人の世界を発見してきた事が嬉しく、何よりも幸せで胸が苦しかった。

それから改めて、亮介に旅立つ時がきているような気がした。

「わかったよ…亮介。」

曲が終わると、胸の中で、温かい何かが込み上げた。

心臓は高鳴り、顔が笑顔になる。

私は、心の底から、亮介と話し会う決意をしたのだった。

春の恋

桜の木に蕾がつき、春の匂いが冬との別れを告げていた。

それは、二人に別れの時間が近づいている証だった。

あの日、亮介と、これからどうするか何度も話し合い、二人で別れを選んだのだった。

悲しいけれど、はつきりとした目的の無い私が亮介の隣にいても、支える事が出来ないと感じたからだ。

もちろん、やってみなければわからないけど、亮介と並んで歩くには、同じ目線であるだけの何かが必要で、亮介を愛してるから、亮介の邪魔をしたくないと決めたから。

それから私たちは、春が来るまで、言葉に出来ない寂しい気持ちと共に、今まで以上に相手を想い、普通に過ごした。

普通に過ごしていたが、どの瞬間もどの言葉もどんな音も逃さないよう、また、忘れないように必死だった。

初めて知った愛してるという感情…

それは、確かに、そこに存在し、今までのどんな時間よりクリアで大切だった。時折、止まって欲しいと願ったが、その想いも虚しく過ぎていった。

それから…

ついに…

二人が別れる日になった。

永遠の別れではなく、二人の未来のため…

そして、いつか、亮介の隣に、また行くためにしなければならぬこと…

沢山あるから…

決断したものの…どうしても、悲しさが残らないと言ったら嘘になる。

それでも、亮介には自分の夢を叶える為に頑張っただけだった。

「もう、行くね…。」亮介が言った。

「うん。」

精一杯の笑顔で、電車に乗って行く亮介を見送ってたかった。

「じゃあ、元気でね…。」

「春喜…いつか逢える事を祈ってる。そして、未来の為に頑張ろうとする君の隣にいられるように頑張るよ。」

「それは、私のセリフだっけ？」

思わず吹き出してしまったが、その言葉が嬉しかった。

「愛してる…春喜。」

「私も。」

最後に最高の言葉を残して、亮介は旅立って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1897b/>

君の隣

2010年12月18日20時45分発行